

『錬金術師』

長堀博士

登場人物／出演者・

女1（ハルコ）

男1（スヌス・ムムリク）

*台本上の「／（斜線）」は、普通の文章では「句読点」があつた場所に、その代わりに入れた記号です。気にせず読んで下さればいいのですが、一応説明すると、読み方としては、一切間を開けずに発話して下さい。うまい読み方としては、間はぜんぜん空けないのですが、発音としては句読点があつた時のものにするのと正解になる場合が多いです。

・
・
・

作品概要（あらすじ）：

謎の部屋に招待されてやってくる女1。もしかしたら夢か幻かも知れない部屋にて、男1が迎え入れる。女1は、スタッフ細胞の研究で一時期は世間をにぎわしていた小保方晴子。しかし、今では社会から廃絶され、影のように暮らしている。男1の巧みな言葉により、彼女の今まで語られてこなかった真実がだんだん露呈してくる。病院のベッドで誰か息を引き取る度、私、心の中で言っている。「ああ、本当なら治せる病気なのに。残念ね、私さえ切り捨てなかつたら治せたのに、つて。」

※舞台・椅子が2つ。中央の椅子には極小のテーブル。

その椅子は、簡素なもので良いが、俳優が立って乗ってジャンプする場面があるため、安定したもの。

上手の椅子には机。可能ならオフィスにあるような、キャスター付きの回転する椅子。なければ、折り畳みでも何でも。背もたれアリ。

机は会議室にあるような長机。黒布で覆う可能性あり。

机には、ポットやカップが。イメージとして「ムーミン谷のような部屋」にて。

舞台、完全暗転。すぐに音楽（M1）F.I.
暗転中、役者1名が板付き。照明が溶明する。

○場面1

M1流れている中。女1、男1がいる部屋にやってくる。

女1 「失礼します… あのう…」
男1 「どうぞ」

男1、部屋の中央の椅子に促す。
女1、ためらい、部屋の中へ…

男1 「今回は体調がすぐれない中、お越しいただきましてありがとうございます」
女1 「いえ、」
男1 「その後体調は？」
女1 「時々めまいが、それに頭痛もひどくて」
男1 「お可哀想に」
女1 「すみません」
男1 「エンがありませんでしたね？」
女1 「えっ？」
男1 「エンが、ありませんでしたね？」
女1 「エン？ 運ではなくてエン？」
男1 「運が悪かったんですか？」
女1 「えっ？ いえ、」
男1 「私は世界とあなたとのエンの話をしているんです」
女1 「…はあ、」

女1、逡巡しながらも、中央の椅子へ。
女1、頭を下げる（M1V↑、その後、だんだん F.O.）

女1 「…あのう…、」
男1 「ここがどこだかご存知ですか？」
女1 「はい？」
男1 「ここはね、ムーミン谷なんですよ」
女1 「ムーミン谷？」
男1 「あなたが今迄暮らしてきた世界とは別なんですわ、ここは、」
女1 「いや、あの…はあ？」

男1 「ご存じでしょ？ ムーミン谷。フィンランドのどこかにある妖精たちの住む谷で、東には「おさびし山」がそびえその麓からは川が流れて、その川にはムーミンパの作った橋がかかっている。その橋の先には、ムーミン屋敷が建っている。ムーミン屋敷の北側にはライラックの茂みがある」

女1 「何を言ってるんですか？」

男1 「私はスナフキンです」

女1 「スナフ、キン…？」

M2 Fi

男1 「自由や孤独を愛する旅人。音楽を愛し、物事を所有することを嫌い、冬が来る前には南へ旅立つが、春の訪れとともにムーミン谷に戻ってくる。ムーミントロールの親友で、主要キャラクターの中では唯一服を着て靴を履いており、ヒトに似た姿だが実は指は4本、しっぽがあり明白に人間とは異なる別の生き物なんです。本当の名前、つまり、スウェーデン語では、スヌス・ムムリクという名前です」

女1 「はい？」

男1 「自己紹介をしたんですが、」

女1 「はあ、」

男1 「私の話している意味が分かりますか？」

女1 「あの、わたしは・・・」

男1 「えー、分かりやすく言いますと、もう嘘をつくなど言ってるんですね」

女1 「何の話ですか？」

男1 「ムーミン谷で嘘つくんじゃねーと言っているんですね、オブラートに包んで」

女1 「何の話ですか？」

男1 「体調悪いと思うとき、こっちもやりにくいんですよ。なんか弱いものイジメしているみたいだし」

女1 「何の話ですか？」

男1 「減量大変だったでしょう」

女1 「減量？」

男1 「ダイエット。そりゃやつれてた方が心象いいですもんね」

女1 「何の、話ですか！」

男1 「記者会見ですよ、例の／ほら、スタップ細胞の」※M2少しあおる。

女1 「…失礼します」（行こうとするが、）

男1 「危ない！」

女1 「えっ！」

男1 「ほら、足元、ニョロニョロ踏んじゃいますよ、周り囲まれてるんですから」

女1 「えっ？えっ？」

男1 「見えるでしょ、あなたになら見えるはずだ。あつ、危ない！動かないで。ま

女1 あまあ落ち着きましようか。どうぞ椅子にお戻り下さい。どうぞ。どうぞ
「……」(渋々、椅子に戻る)

○場面2

M2、あおってからF.O.

男1 (ココアを入れ始めながら…)「そうそう、群馬県に昔小保方って地名があつて、その出身の方は皆、小保方姓を名乗ったそうですね。ご出身は群馬の方で?」

女1 「さあ」

男1 「不貞腐れないで下さい。小保方、…珍しい苗字ですよね、昨年の一連の報道で初めて知りました」

女1 「……」

男1、ココアの入ったカップを自分のと、女1へ用意をする。

男1 「…ココアでよろしいですか?」(近づくと)

女1 「あつ、はい。あつ、ニョロニョロが!」

男1 「おっと、これは失礼、じゃあこっちから、(回り込んで、椅子の背中から、手を伸ばして)はい、どうぞ」

女1 「……ありがとうございます」

男1 「いいえ、どういたしまして。…、こういう時にもありますがどうと云える、いやあいいですねえ、そこが人気の秘訣ですね/実にいい。育ちかなあ、」

女1 「嫌みですか」

男1 「いいえ素直に感動しているんです/よく、計算されてるなあと思って、」

女1 「計算…」

男1 「ああ今のは嫌み入っていました」

女1 「……」(ため息)

男1 「では、まあお話しただきましようか?/ねえ、せつかくご足労いただいたんだ、この真相を」

女1 「どの話ですか?」

男1 「どの?」

女1 「別に新しくお話するようなことはありませんけど/まあ、いいですよ、どんな疑惑にも反証してみせます」

男1 「そうですね、では/まず、一番大きな疑問から。そもそも小保方晴子という女性は何存在するんですか?」

M3、CI.3秒で急激にF.O.

女1 「はい？」

男1 「貴女。貴女は本当は一体、誰なんですか？」

女1 「えっ？ どういう意味ですか？ あの、私が、私ですけど」

男1

「今回の報道ではよく、ES細胞の話も出てきますね。万能細胞と呼ばれている中では1964年とかなり古くから存在が確認されている。今では研究者なら誰でも簡単に作る事が出来る／そんな、ポピュラーな万能細胞です。実はね／みんな、報道見る度に／あれ？ ES細胞ってのがあるならスタッフ細胞なんていらんじゃないの？ って思っているんです。えー何でスタッフ細胞に皆こだわるの？ スタッフ細胞の偽装としてES細胞使ったって疑惑だけど／えっ？ じゃあES細胞でいいじゃん。いらんじゃんスタッフ細胞！、ってな具合です」

女1

「それは、

M4 FI

∴ES細胞は確かに、今では研究施設さえあれば簡単に作る事が出来ます。でもES細胞には胚が必要なんです。胚、受精卵、そのまま育てれば命になる、それが人間なら一人のヒトになる／受精卵です。動物実験は認められていますけど／人間で、それを行うことは倫理上の問題で禁止されています」

5 / 11

男1

「そんなきれいごと」

女1

「きれいごとでも何でも、だって仕方がないでしょ？ 万能細胞の研究は要するに医療への貢献が目的です。今まで治せなかった病気を治し、ヒトの命を救うことが目的なんです。ヒトの命を救うために他の誰かの命が犠牲になるなんて本末転倒もいいところです」

男1

「そうですね、まったくその通りです。だから受精卵を守るために、分かりやすく言うなら／生まれてくる命を守るためにはどうしても、別の方法で作られる万能細胞が必要だった。これはそういう物語です。生まれてくる命を守る、そんなドラマの中では／どうしても母性を象徴するようなヒロインの存在、女性・の研究者が必要だった。そこに話を盛り上げるエピソードが必要だった／ねえ、それでキャスティングされたのが小保方さん、貴女なんじゃないんですか？」

女1

（思わず立ち上がり）「私が、ただの役者だって言いたいんですか？」

男1

「ただの、ではありませんよ小保方晴子、彼女はかなりの名優ですねえ／みんな

女1 「な、すっかり騙されました」

女1 「違います／私は、ちゃんとした研究者です！」

男1 「えー本当に？ ここはムーミン谷ですよ。人の世の理^{ことわり}は無視して構わないんですよ」

女1 「ここがどこだろうが関係ありません！」

男1 「スナフキンには素直に悩み打ち明けていいんですよ」

女1 「やめてください。ムーミンを汚さないで下さい」

男1 「あら、私がムーミンを汚す？ いやいや汚すことが出来るのは／それが、可能なのは研究室のデザインまでムーミンにした誰かさんの方ではありませんかねえ？」

M4、大音量で4秒くらい聞かせてから突然〇〇…静寂。

女1 「……」（長い沈黙……）

男1 「おや、黙っちゃいましたか、……ねえねえ、あれ、言ってもらえませんか」

女1 「……」

男1 「ほら、記者会見での、あれ、スタッフ細胞は、ありまーす！ パシャパシャパシャ。随分練習したでしょう。流行語大賞あとちよつとでしたね？ スタッフ細胞は、ありまーす！ パシャパシャパシャ。シビレましたねえ」

女1 「うるさい」（小さく）

男1 「えっ？」

女1 「黙れ……！」

男1 「黙るから言ってもらえますか？ なし汁ブシャーに並ぶ名言ですからねえ。

女1 「聞きたいなあ、生スタッフ細胞はありまーす！」

女1 「死ね」

男1 「ですから、何度も言ってますがここはムーミン谷ですよ、妖精の谷ですよ。

女1 「死ねはちよつと、ねえ、どうなんですか」

女1 「ああああ頭痛い」

男1 「その同じ口がヒトの命を救うためとか話してたとは思えませんねえ、おお怖っ、」

女1 「頭痛いって言ってるでしょ！ ええ／ええ／分かりましたよ／分かりました。ええ／今、死ねなんて言ったの撤回します」

男1 「撤回だけ？」

女1 「撤回して、…謝ります。どうもすみませんでした」

男1 「どっかの政治家みたいですね。んー、心がこもっていませんがー、まあ許しましょう。私は寛大な心の持ち主ですから」

女1 「どうもありがとう」

男1 「はははっ、どういたしまして」

M5 (M2と同じ曲)、FFI すぐに安定したポリウムに。
ココアを飲む二人。

○場面3

男1 「ねえねえ、話は変わりますが、昨年のAKBの殺傷事件覚えてますか？」

女1 「えっ？」

男1 「知りませんか？ 事件あったの。自分のことで精一杯でそんなこと知らないか。あっ！ ヤバッ、もしかしてAKB48を知らないとか！」

女1 「バカにしないでください！」

男1 「じゃ事件があったのは？」

女1 「もう研究続けられないので、詳しいですよ、握手会で、ファンの子に切りつけられて怪我した子が2人、1人は最近、それが原因でAKB抜けるって……」

男1 「りっちゃん」

女1 「りっちゃん？」

男1 「あ、いや、でもアルバイトの男の子も怪我したみたいですので事件での怪我人は3人ですか」

女1 「それが何か？」

男1 「私ね、いや、そんな事件があった後、AKB辞める子が増えたと出てもいいと思うんですがどう思います？」

女1 「犯人は捕まったんでしょ？」

男1 「いやいや、今回の事件って、AKBってアイドル活動のリスクを分かりやすく示した事件だと思うんですね。犯人1人の問題じゃない。でしょ？ 劇場という不特定多数が集まる場所で、恨みがあるとかではなく、ただ有名で華やかだというだけで、『殺すのは誰でも良かった』って殺人者に殺されるかも知れない。そんな自分たちがやっていることのリスクを分かりやすく示した事件だと思えます。なのに、どうです？ ぜんぜん辞めないんですよ。AKBって何人いるか知ってます？ 48人じゃありませんよ、300人くらいいるんです。300人もいて、彼女達には600人くらいの親や保護者がいて、誰も辞めるとは言わない。誰も辞めた方がいいと助言しない。命を失うかもってリスクを平気で取り続ける。ね？ 異常だと思いませんか？ アイドルってそこまですてやり続けることでしょうか？」

女1 「お金じゃないですか？」

男1 「お金！」

女1 「どれだけ儲かるのか想像つきませんが、経済的な理由大きいと思いますよ。この世の中は何だかんだ言ったって経済観念で動いているんです」

男1 「ふーん、そうですね、まったくその通りかも知れませんが。(満面の笑顔)で、

総選挙の話ですが、

女1 「あなたAKBのファンでしょ!」

男1 「な、な、なんてこと言うんですか! ぼ、僕が指原が一位に返り咲いて、よ、喜んだとも言うんですか!」

女1 「喜んだんですか?」

男1 「いや、」

女1 「喜んだんですか?」

男1 「正直に言えば、……。ああ話したいのはそっちじゃなくて、ね、あの子供み

たいな若い女の子達、その総選挙の発表の中ですごく仕事って言葉を使ったんですね。順位が違うと仕事がぜんぜん変わるってハッキリと口にする子がけっこういる。ああこれはビジネスなんだなって思ったんです/これは、紛れもないビジネスだと」

女1 「そりゃそうなんじゃないんですか、当たり前でしょ?」

M5、F.O.

男1 「スタッフ細胞も、ねえ、かなり大きなビジネスでしたえ」

女1 「えっ?」

M6、C.I. 音の2フレーズの終わりで急激にF.O.

男1 「もし、スタッフ細胞が存在するならば、その作り方を知ることが出来たら、物凄く化け物クラスのビジネスになりますよねえ/言わば、医療革命だ。どれだけのお金が懐に入るか想像もつかない」

女1 「それが?」

男1 「いやあ、小保方さんがスタッフ細胞の作り方をちゃんと教えないのはさ、そりや当然だなって思ったんですよね。だってもし仮に誰でもスタッフ細胞作れるようになったら、ねえ、懐に転がり込んでくる莫大なお金がオジャンになっちゃう。科学というのは再現性が重要だと思うのですが、誰か他人の手で再現なんかされちゃったら、たまったもんじゃない。ほら、これで分かったでしょう?」

女1 「はい? 何が分かったって言うんですか?」

男1 「私はあなたの味方です。良き理解者なんですよ」

女1 「はい?」

男1 「すべてはお金の為! だったんですよね!」

女1 「何の話ですか?」

男1 「本当の作り方を教えないのは、お金の為だって言ってるんです」

女1 「汚らわしい」

男1 「えっ？」

女1 「言っときますけど、研究者というものはもっと純粹なんです。ある意味、バカって言うか、お金とかそういうことに興味が持てないで、無頓着な人間があるな、地味で時間がかかることが出来るんです」

男1 「またまた」

女1 「本当、そういう人が多い！ だから変人って言われる人が多い！」

男1 「信じられませんね」

女1 「別に聖人だともでは言いません。でも、そこまで汚くない」

男1 「ここはムーミン谷ですよ、心を開いて下さいな、目の前のスナフキンに」

女1 「ムーミン谷は！」

男1 「はい？ なんですか？」

女1 「……別にいいです、」

男1 「いいですよ、言ってください、言い掛けて気持ち悪いじゃないですか」

女1 「ムーミン谷は、あります」

M7、小さくC1 ※話に合わせてボリューム微調整（ボリュームは比較的に大きめに）

男1 「はい？」

女1 「ムーミン谷は、あります！ 妖精が住んでいるムーミン谷は確かに存在します。私、何度も実験で成功させてます。実験ノートは2冊だけじゃありません。

まだ隠して持ってます。見せませんけどね。見せませんけどね！ スナフキンって旅人だけが時々、こっちの世界に来て話を聞かせてくれる世界なんです／私、長い間の研究生活でやっとな真実に辿り着いたんです。でもね／私、もしスナフキンが目の前に現れて、本物のスナフキンが現れて『行こう』って手を伸ばしたら／あっちの世界に、旅立とうと思えます。研究データを全部持って、そうするとね、もう二度とこちらの世界にはスタップ細胞なんて存在しないことになる。

誰にも／絶対誰にも見つけられない、錬金術になる。ふふ、後悔してももう遅いわ。あんなにチャホヤしてた癖に、今度は手のひら完全に引っくり返して私を追い込んだ。トカゲの尻尾切りですって。尻尾？、ですか？ 私が？ 頭部から一番遠い尻尾？ 冗談じゃない！ いくらなんでもそれは酷い！ 唯一、唯一それには私腹が立ちました。尻尾？ 尻尾だなんて……死ねばいい。みんな。スタップ細胞さえあれば治るのに、治せるのに、治すことが出来ない病気で皆苦しんで死ねばいいのよ。私ね、私ったら、人を殺すのに凶器がいらぬのよ。病院のベッドで誰か息を引き取る度／私、心の中で言ってるの。あーあ、本

当なら治せる病気なのに／残念ね、私さえ切り捨てなかつたら治せたのに、つて。私はこれから、自分の手を少しも汚すことなく人を殺して行くことになるんです。次々と、無差別に、恐ろしい数。私が仮病？何言ってるの、頭くらい痛くなるわよ！目眩くらいするわよ！クラクラするわ。ここから先、人が1人死ぬ度に私に、私にも責任がかかってくるんですから！どうかしら？お聞きしたい話、聞きましたか？さようなら。もう会うこともないでしょうけど」

女1、椅子に乗り、ジャンプしてニョロニョロを飛び越え、遠くに着地する。行き掛けるが、

M7、大音量。女1が着地して、歩き始めたら突然〇〇。
…静寂。

男1 「小保方さん！」

女1 「何ですか？」

男1 「スタッフ細胞は、あるんですか？」

女1 「……」

男1 「スタッフ細胞は、あるんですか？」

女1 (笑顔) 「……小保方って誰ですか？」

M8、F1

ふふふ、そうなんです、縁がなかったんですね、私…、このセカイと、さようなら……」

颯爽と去っていく女1。

男1が一人いる部屋の風景。

Mがずっと鳴っている。

しばらくして、照明が突然ブラックアウトする。暗転。

Mがずっと鳴っている。

終わり。

2014年、東京で初演、島根で再演。

2015年に改稿・札幌で再演。

小道具・

机（普通の長机）

椅子（オフィス風な）

椅子（人が立って乗る為に安定したもの）

長机にかける黒布 小テーブル カップ×2

ポット その他、机の上のこまごまとしたもの。

*台本提出選考があったあった作品にて、上演が決まった後にもスタッフ用台本の郵送での提出が必要な為、音響などやたら細かいト書きがあり。